

野上記念法政大学能楽研究所

I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021年度大学評価結果総評】(参考)

能楽研究所は、研究資料のデータベース(デジタルアーカイブ)化・共同研究やシンポジウムの開催・『能楽研究』や刊行物の出版などの研究成果の公表・科研費の獲得などの活発な活動により、学内外のみならず国際的にも高い評価を得ている。7年間に渡って尽力されてきた『英語版能楽全書』プロジェクトは、それをさらに高める一大事業と言え、完成に大きな期待を寄せたい。

また、従来の能楽研究の枠にとらわれない、学問分野を超えた領域との連携や共同研究を志向するなど、独自の試みを積極的に行っており、その成果を上げつつある。

つまり、「学際的・国際的能楽研究の拠点」として優れた活動を展開している。

COVID-19が猖獗を極めた2020年度においても、オンラインなどを駆使して従来と変わらぬ、あるいはそれ以上の活動を行っており、また研究所・閲覧室の消毒を徹底し、感染拡大防止や外部の閲覧利用者への配慮も十分に行うことで、研究所としての文化的・社会的存在意義を全うしている。

所員スタッフの加重負担については、理事会や関係部局との協議や支援要請などを通して、軽減される方向に向かうことが望まれる。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

『英語版能楽全書』プロジェクトはいよいよ最終段階に入り、2022年2月には全ての原稿を提出して Brill 社より出版の同意を得、現在査読中。掲載画像300点(能楽研究所蔵の資料も多い)についても、各地の美術館・博物館をはじめ、能役者個人、演能団体、撮影者等々の理解を得、比較的到低い金額で入手することができている。2022年度中に刊行の予定である。

コロナ対策でオンラインによる共同研究を進めてきたが、資料の閲覧などには不具合も多く、より多くの資料を網羅的にデジタル公開する必要性を痛感したため、文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業(能楽の国際・学際的研究拠点)機能強化支援」に応募し、幸い採択された。資料のデジタル化を推進し、対面・オンラインどちらでも研究活動を進めていけるよう、さらに努めていきたい。

【2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

野上記念法政大学能楽研究所(以下、能楽研究所)が成し遂げてきた、幅広い学際的研究と成果の公表姿勢は賞賛に値する。とりわけ、『英語版能楽全書』の出版は、同研究所の絶え間ない真摯な研究努力の結晶とも言えるものであり、その文化的、社会的意義は、一大学研究所の業績の枠を大きく超えるものである。

感染症禍に見舞われた2021年度の研究活動については、まずは文部科学省の支援を得た資料デジタル化推進の成果に期待したい。もはや研究成果の公表には、積極的なオンライン広報が不可欠であり、資料のデジタル化はこの基礎となる部分である。

広く日本社会の宝とも言える、同研究所の文化・芸術研究を、今後も継続、発展させるべく、大学理事会はもとより、社会各層、自治体、そして国による、絶え間ない支援が望まれる。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、研究所(センター)の目的を適切に設定しているか。

1.1①研究所(センター)として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。2018年度1.1①に対応

はい

※理念・目的の概要を記入。

中世に生まれた日本最古の演劇である能楽(能・狂言)の、歴史的変遷を調査・研究するとともに、現代に生きる演劇としての魅力や芸術性を解明し、能楽研究の発展と能楽の振興を目指すこと。

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018年度1.1②に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

※検証を行う組織（各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

学内の運営委員で構成されている運営委員会の定例会議で、個々の活動の適切性について検証を行う際に、その基準となる理念・目的自体の適切性も再確認している。

共同利用共同研究拠点の運営委員会（外部の有識者を過半数含む九名）において、年度初めと年度末の二回、研究所の年間の活動予定・活動成果についての総括と検証を、上記の理念に基づいておこなっている。

1.2 研究所（センター）の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①研究所（センター）の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018年度1.2①に対応

はい

（2）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

当研究所の理念は創立当時に設定されたものだが70年が過ぎても色あせることなく、研究所の座すべき道を的確に示している。文科省の共同利用共同研究拠点として新たな活動を企画しても、当初の理念から外れることはない。逆に言えば70年前に目指した理念がそれだけ正しい方向を向いていたのだと考えている。

（3）課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

特になし

【理念・目的の評価】

能楽研究所の理念は創立当時、すなわち、70年前に設定されたものであるが、それは色あせることなく、貫かれている。それだけ目指す理念と目的は正しい方向を向き、明確であるといえる。また、その適切性の検証についても、「能楽研究所運営委員会」（学内）の定例会議と、文科省の共同利用共同研究拠点として、外部有識者を含む「能楽の国際・学際的研究拠点」運営委員会で年二回の審議、検証を受けている。

これら情報の公表も適切になされており、理念・目的の項目における能楽研究所の対応は、高く評価できる。

2 内部質保証

（1）点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

2.1①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応

はい

【2021年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

1) 能楽研究所運営委員会

構成員

山中玲子 法政大学能楽研究所所長

宮本圭造 法政大学能楽研究所教授

阿部真弓 法政大学文学部教授

伊海孝充 法政大学文学部教授

坂上 学 法政大学経営学部教授

鈴木 靖 法政大学国際文化学部教授

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

竹内晶子 法政大学国際文化学部教授
 岩月正見 法政大学デザイン工学部教授
 高村雅彦 法政大学デザイン工学部教授

活動概要

原則として月一回、運営委員会を開き、研究所の活動の検証を行っている。2021年度は4月、5月、7月、8月、9月、10月、11月、2月（2回）、3月に、計10回、実施した（コロナ感染拡大防止でオンラインまたはメール審議）。

2) 文部科学省認定「能楽の国際・学際的研究拠点」運営委員会

構成員

金井 敦 学術支援本部担当常務理事
 山中玲子 法政大学能楽研究所所長
 宮本圭造 法政大学能楽研究所教授
 坂上 学 法政大学経営学部教授
 入来篤史 国立研究開発法人理化学研究所チームリーダー
 大谷節子 成城大学文芸学部教授
 観世喜正 観世流能楽シテ方、能楽協会理事
 竹本幹夫 早稲田大学文学学術院教授
 豊島正之 上智大学文学部特別契約教授

原則として年に二回、運営委員会を開き、研究拠点としての活動の検証を行っている。2021年度は4月12日と3月22日に実施した。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

研究所の運営委員会、拠点の運営委員会ともに、能楽研究の専門家と、それ以外の分野の専門家でありながら能楽研究所の活動を積極的に応援してくれる（あるいは種々の形で研究協力をしたことのある）方々とで構成されており、委員会では、それぞれの専門や経験から適切な助言を得ることができている。具体的な共同研究の計画のほか、文科省に提出する会計書類の書き方等、国の予算での大きなプロジェクトを動かした経験のある方々からの指摘や助言は大いに役立っている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容

特になし

【内部質保証の評価】

能楽研究所では、質保証活動に関する委員会は、9名の構成員からなる能楽研究所運営委員会（月1回開催）と、外部有識者5名を含む9名の構成員からなる「能楽の国際・学際的研究拠点」運営委員会（年2回開催）によって定期的に行われており、適切である。

3 研究活動

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）2021年度1.1①に対応

<p>※2021年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。</p> <p>・セミナー・シンポジウム等の開催</p> <p>○シンポジウム「能と謡文化」（能楽学会と共催） 日時：2022年3月12日（土）13：00～17：25 オンライン 参加者113名</p> <p>○研究会例会「世阿弥の「花」のイメージの変化について」（能楽学会と共催） 日時：2021年4月12日 オンライン 参加者29名</p> <p>○研究会例会「室町後期から江戸初期における笛の「音取」一旋律の特徴を中心に」（能楽学会と共催） 日時：2022年2月28日 オンライン 参加者37名</p> <p>・学内向けの企画</p> <p>○国際日本学インスティテュート合同演習「能楽を楽しむために」 日時：2021年10月9日 国際日本学インスティテュートの大学院生を対象にした能楽の基礎知識に関する講義、及び能役者による実技指導のワークショップ</p> <p>○Lステゼミ「能楽研究所って知ってる？ —法政大学のお宝案内」 日時：2021年11月24日 オンライン 全学部横断のショートゼミ。能楽研究所の所蔵する貴重資料に関する解説。</p>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし

3.1②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）2021年度1.1②に対応

<p>※2021年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）の詳細を箇条書きで記入。</p> <p>○研究所の刊行物</p> <p>『近世諸藩能役者由緒書集成』（下）2022年2月25日刊行 全580頁 『能楽研究』第46号 2022年3月25日刊行 全288頁</p> <p>○学会発表等</p> <p>日本文学や演劇、芸能史研究等の学会では、パネル発表などを行う場合以外、共同研究の発表をおこなうことは稀である。以下では、研究所としての活動の一環として個人がおこなった発表を掲げる。</p> <p>・宮本圭造「由緒書に見る能楽史」 2021年5月9日 六麓会（オンライン開催） ・山中玲子「能《半薺》を読み直す—シテはどんな場所にいるのか—」 2021年12月27日 廃墟研究会（オンライン開催）</p>
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
<p>・能楽研究所サイト研究成果報告 野上記念法政大学能楽研究所 (hosei.ac.jp) 『能楽研究』 野上記念法政大学能楽研究所 (hosei.ac.jp)</p>

3.1③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）2021年度1.1③に対応

<p>※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対する2021年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2021年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。なお、研究所（センター）に該当するものがない場合は、研究所員によるものを含めることができる。但し、この場合は研究所の研究領域に関係するものとする。</p> <p>研究所がこれまでに発行した刊行物は多数に上るため、その引用数を全て把握することは困難であるが、2021年刊行の『宮増小鼓伝書の資料と研究』が学会誌『藝能史研究』236号（2022年1月）の「紹介」欄で取り上げられているほか、能楽研究所編『鴻山文庫蔵能楽資料解題（上）（中）（下）』（1990年・1998年・2014年）が『謡の家の軌跡』（和泉書院、2022年）に多数引用されているのが目に入った。</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

本研究専任所員の論文引用数については以下の通り。

書籍に関しては、『狂言作品研究序説』（和泉書院、2021年）に専任所員2名の論文の引用が計4件、『謡の家の軌跡』（和泉書院、2022年）に専任所員2名の論文・著書の引用が計4件、『宗教芸能としての能楽』（勉誠出版、2022年）に専任所員2名の論文・著書の引用が計7件見られるほか、奈良県立美術館特別展図録『森川杜園展』（同館、2021年）・上杉博物館企画展図録『上杉家伝来能面・能装束』（同館、2021年）・国立能楽堂特別展図録『日本人と自然』（同館、2021年）に専任所員1名の論文・著書の引用が各1件見られる。学会誌では、能楽学会の紀要『能と狂言』19号（2021年）所収の2本の論文に専任所員2名の論文・編著が計3件、『近畿民俗』188号（2022年）所収の論文に専任所員1名の論文が2件引用されているほか、藝能史研究会の紀要『藝能史研究』235号（2021年）所収の2本の論文にも専任所員1名の著書が多数にわたって引用されている。また、専任所員1名が監修・執筆をつとめた特別展図録が同誌233号（2021年）の「芸能史の書棚」欄に取り上げられ、「能の興行史全般を知る上でも、必読書となることは間違いない」として、高く評価されている。その他、学術的な商業誌である雑誌『観世』所収の2本の論文に専任所員1名の論文の引用が2件、雑誌『ZEAMI』5号（2021年）所収の2本の論文に専任所員2名の論文の引用が計3件、日本美術史関係の雑誌『國華』1517号（2022年）所収の論文に専任所員1名の論文の引用が1件あった。この他、大学紀要等にも専任所員2名の論文の引用が散見し、本研究専任所員の論文が能楽及び関連の学界においてまず参照されるべき重要論文として高く評価されていることが窺われる。

能楽研究所が公開しているデジタルアーカイブへのアクセス数は以下の通り。

- ・能楽資料デジタルアーカイブ 3,395回
- ・伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ 657回
- ・金春家旧伝文書デジタルアーカイブ 14,841回（2021/4/17-2022/4/1の集計）
- ・昭和初期 能楽映像アーカイブ（鴻山文庫蔵「能楽断片・名家の面影」 鴻山文庫蔵「宝生流大連演能」）378回

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

3.1④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）2021年度1.1④に対応

※2021年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

定期的な外部評価は受けていないが、文科省の共同利用共同研究拠点として、学内外の構成員から成る運営委員会によるチェックやアドバイスを受けている。学外の委員には、早稲田大学演劇博物館の前館長、理化学研究所のチームリーダーなど、長年にわたって大型研究プロジェクトを率いてきたメンバーも多く、他機関との研究協力のあり方や予算の立て方など、具体的な研究方針についても、たいへん有益で実際的な注意・注文・助言等を得ている。

また、文科省の共同利用共同研究拠点として、毎年度、詳細な実施計画書と実績報告書を提出しており、特に21年度は新たに機能強化事業に応募したため、研究実績や今後の研究計画等について、さらに詳しい書類審査と面接審査を受けている。

以上を通して、第三者からの評価や助言を受ける体制は整っており、また、専任二名の態勢で、これ以上の書類作成業務は増やしたくないため、現状に加えて外部評価を受ける計画はない。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

3.1⑤科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況 2021年度1.1⑤に対応

※2021年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金及び2021年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者（代表・分担の別）、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を箇条書きで記入。

【代表者として採択】

- ・山中玲子 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築

2021-04-05～2025-03-31 4,500,000円 (21H04350)

- ・宮本圭造 基盤研究(B) 近世大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究 2020-04-01～2025-03-31 1,200,000円 (20H01234)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>・山中玲子 特別研究員奨励費 世阿弥伝書のデジタル写本の作成および書承・伝播・受容の分析 2021-04-01～2024-04-01 400,000 円 (21F21702)</p> <p>【分担者として採択】</p> <p>・山中玲子 基盤研究(C) 音楽的分析のための能楽の謡の多層的なモデル化 2020-04-01～2023-03-31 80,000 円 (20K00136)</p> <p>・山中玲子 基盤研究(C) 古代・中世日本における廃墟の文化史 2020-04-01～2023-03-31 150,000 円 (20K00337)</p> <p>・宮本圭造 基盤研究(A) 能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築 2021-04-05～2025-03-31 100,000 円 (21H04350)</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>特になし</p>

3.1⑥研究所（センター）における研究活動に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。2021年度 1.1⑥に対応

<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>(1) 研究所及び閲覧室の各室内は、1日3回の消毒を実施。消毒作業の概要は研究所内に掲示し、実施もれの無いよう行っている。</p> <p>(2) 新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置等期間など、地方在住の共同研究プロジェクトメンバーが資料調査に来られない際には資料のデジタルデータを優先的に渡すなどして、研究への支障が出ないように努めている。</p> <p>(3) 研究会や研究活動に係る打合せ等を実施する際には、できるだけ対面を避けてオンラインで開催するよう努めている。</p> <p>(4) 出張その他で学外で研究活動を行う際には、緊急事態措置及びまん延防止等重点措置等が適用されている場所・期間を避けるよう努めている。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>1_消毒作業概要（研究所内掲示）</p>

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<p>上記のとおり活発に活動していると自負している。</p>

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
<p>特になし</p>

【研究活動の評価】

<p>能楽研究所の研究・教育活動実績は優れたものである。プロジェクト、シンポジウム、出版物発行、学会発表等の対外的成果発表は、高い社会的評価を得ており、科研費等の外部資金の応募・獲得状況も十分に満足できる。</p> <p>定期的な第三者評価は特段受けていないが、質保証の段階で、構成員の過半数を外部有識者で占める「能楽の国際・学際的研究拠点」運営委員会の審議と検証を受け、さらには文科省の共同利用共同研究拠点として、毎年度、詳細な実施計画書と実績報告書を提出するなど、同研究所の評価体制は完備している。加えて2021年度は、機能強化事業応募の</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

際に書類審査・面接審査を受けており、第三者からの評価や助言を受ける体制は整っているといえる。現下の限られた人員（専任2名）と限られた予算の枠内で、評価に向けて研究所が下した判断は妥当である。
研究活動に関する COVID-19 対応・対策についても、同研究所の措置は適切である。

4 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

4.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどを配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018年度4.1①に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※教育研究支援体制の概要を記入。

大学院博士課程の学生を RA として採用している。英語版能楽全書刊行プロジェクトでは、原稿の校正、掲載画像の選択と申請手続きの補助などを依頼し、また、能楽研究所や研究拠点での研究状況、研究成果をウェブサイトで発信する仕事でも助力を得ている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

特になし

4.1②研究所（センター）として、教育研究環境の整備に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。新規

※取り組みの概要を記入。

- (1) 研究所及び閲覧室の各室内は、1日3回の消毒を実施。消毒作業の概要は研究所内に掲示し、実施もれの無いよう行っている。
- (2) 閲覧室の利用については以下のとおり。
 - a 開室状況は Web サイトで随時利用者に知らせ、急な閉室があり得ると告知したうえで開室。
 - b 開室日は週3日。利用は1日につき午前・午後・夜間の時間枠それぞれ計2人を利用上限とし完全予約制にて許可している。
 - c 利用希望者は予約時に連絡先を伝えることを必須とする。
 - d 利用者は入室時に研究所の体温計で体温測定のうち、氏名を記帳する。
上記c及びdの記録をとることで、感染者がいた場合の濃厚接触者の特定及び連絡先を確保している。
- (3) 研究所会議室においては、授業・会議等の利用がほぼ毎日あることから、机上設置の亚克力製仕切り台を24個購入し使用している。
- (4) 閲覧室・能楽研究所・会議室については、各室使用時はドアを常時開放している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

1_消毒作業概要（研究所内掲示）

2_体温計・亚克力仕切り台写真（能楽研究所）

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

大学院博士課程の学生を RA として活用することで、研究所の活動を支えてもらうと同時に、学生の方も、有名な研究者と接する機会や貴重な資料に触れる機会を得て、研究の励みとなっている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

内容
デジタルアーカイブの構築や研究成果の積極的発信のため、技術スタッフにはいてほしいが、恒常的に置くことはむずかしい。

【教育研究等環境の評価】

能楽研究所では、大学院博士課程の学生を RA として配置することによって、研究活動と成果発表の助力としている。また同時に、この RA 採用は、大学院生の学びの場として貴重であり、著名研究者とのコミュニケーションや資料閲覧の機会は、次世代の研究者育成に重要な役割を果たしているもので評価できる。

学生の学習環境や教員の教育研究環境の整備に関して、COVID-19 への対応・対策も適切である。

5 社会貢献・社会連携

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

5.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018 年度 5.1①に
対応

S：さらに改善することができた

※取り組み概要を記入。

積極的に実施している。2021 年 7～8 月には、能楽協会主催の「東京 2020 オリンピック・パラリンピック能楽祭」で配布するパンフレット中にある「能楽ガイド」を本研究専任所員・兼担所員で分担して執筆し、英語での解説執筆も手配して日本語と英語の双方を掲載した。10 月には、日本博の一環として行われた「大山火祭薪能」に協力し、同時開催の「大山阿夫利神社蔵能面特別展」の監修・解説を担当した。これにも英語版の解説を付し、広く外国人の需要に応じた。

博物館・美術館の展示を通じた社会連携にも積極的に取り組んでおり、上杉博物館の開館 20 周年記念企画展「上杉家伝来能面・能装束」(10～12 月)に能楽研究所として全面的に協力したほか、国立能楽堂特別展「日本人と自然」(4～6 月)に法政大学鴻山文庫蔵の「光悦謡本」(特製本)、同企画展「小道具から見る能」(11～12 月)に能楽研究所蔵「能楽双六」他計 8 点を出品、美術館「えき」KYOTO 展覧会「能面 100」(2022 年 1～2 月)の作品解説を全て担当するなどしている。なお、上杉博物館での企画展は、本研究が進めている「能楽の国際・学際的研究拠点」の公募型共同研究の研究成果を社会に還元すべく企画されたものである。

能公演の解説や講座等を通じた社会貢献も数多く、2021 年度には、ロータリークラブでの能楽概説(2021 年 5 月)、国立能楽堂主催講座の講師(6 月)、グランシップ静岡館の企画・解説(2022 年 1 月)、各流能会での公演解説、NHK の番組「誰も知らない文化財一謎の能面」(2022 年 2 月)の制作監修などを行った。

【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

以前は研究所の所員に個人的に依頼が来て解説等を務めたが、最近はそれだけでなく能楽研究所の活動を知った団体が研究所に講師を依頼してくるケースが増えている(上記ロータリークラブや、実施は 2022 年になるが依頼が 21 年にあった、佐倉の市民大学など)。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

3_「東京 2020 オリンピック・パラリンピック能楽祭」パンフレット～喜びを明日へ～ ※抜粋

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
能楽協会、国立能楽堂など、能楽界の中心にある組織をはじめ、各流の演者とも基本的に良好な関係を築けており、能楽の発展のため、十分に貢献している。

(3) 課題・問題点

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし

【社会貢献・社会連携の評価】

能楽研究所の研究成果の社会還元等、社会貢献活動の取り組みは高く評価できる。

「東京 2020 オリンピック・パラリンピック能楽祭」での「能楽ガイド」、「大山火祭薪能」への協力、「大山阿夫利神社蔵能面特別展」の監修・解説ならびに英語版解説、上杉博物館開館 20 周年記念企画展への協力をはじめとする、博物館、美術館との社会連携、その他、能公演の解説や講座等の開催など、同研究所の 2021 年度成果は特筆に値する。

6 大学運営・財務

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

6.1①運営委員会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度6.1①に対応

はい
※概要を記入。
所長と専任所員、兼担所員からなる運営委員会の組織を設け、「野上記念法政大学能楽研究所規程」に則った運営を行っている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
4_野上記念法政大学能楽研究所規程（規定第 153 号）

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
特になし

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし

【大学運営・財務の評価】

能楽研究所では、所長、専任所員、兼担所員を構成員とする運営委員会の組織を設け、「野上記念法政大学能楽研究所規程」に則った運営を行っている。

III 2021 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
	年度目標	『英語版能楽全書』のプロジェクトを完了させて国際研究拠点としての現段階での成果を示

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

		し、同時に、デジタルアーカイブのさらなる充実をめざす。	
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> デジタルアーカイブに新たに 30 点以上の資料をアップする。 能楽研究所所蔵資料仮目録をウェブ上で公開。 『英語版能楽全書』の編集と出版契約手続きを完了する。 	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	<ul style="list-style-type: none"> 新出の『名女川本狂言台本・伝書』や近代の能楽史料など計 45 点の資料を、デジタルアーカイブに解説付きでアップした。 能楽研究所所蔵資料仮目録は、仮書名と番号の入力を完了したものの、なおチェックを要するため、ウェブ上での公開には至らなかった。 『英語版能楽全書』は編集をほぼ完了し、オランダ・ブリル社に原稿を提出した。現在、査読を実施中である。
	改善策	今年度中のアップが実現できなかった能楽研究所所蔵資料仮目録については、次年度、兼任所員の力も借りて、現物との照合等を終えた後、早めにアップしたい。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。	
	年度目標	国立能楽堂ほか能楽団体、地方自治体、学校等々と協力し、貴重資料の展示、能楽講座、解説等を通して能楽の普及と発展に努めていく。	
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 能楽研究所所蔵資料を出展する展示 1 回以上。 国立能楽堂の講座ほか、解説等 3 回以上。 	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		<ul style="list-style-type: none"> 国立能楽堂展示室で開催される特別展「日本人と自然」に「光悦謡本」(特製本)を、企画展「小道具から見る能」に「能楽双六」他 8 点の資料を出展した。 東京 2020 オリンピック・パラリンピック能楽祭のパンフレット解説執筆、伊勢丹美術館での「能面 100 展」図録解説執筆、国立能楽堂の講座 1 回、ロータリークラブでの講話 1 回、喜多流狩野了一能の会での公演解説 1 回、大山阿夫利神社能面・能装束展の展示解説 1 回、グランシップ静岡能での公演解説 1 回を行った。 	
	改善策	特になし	
<p>【重点目標】 昨年度、予定通り進めることのできなかった『英語版能楽全書』の編集作業を完了し、刊行に向けた正式契約を終える。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 国内外の多人数が関わるプロジェクトであるため、当初から進行の早いところと遅いところの差が大きく、全体の編集作業に影響を与えてきた。だが本プロジェクトはすでに 7 年目に入っており、昨年度は covid-19 の世界的な感染拡大の影響を受けたとはいえ、これ以上刊行を遅らせることはできないことを全員で再確認し、遅れている箇所については場合によっては捨て、必須項目の場合は人員配置を再検討するなどして、今年度中の編集完了を実現させる。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 目標はほぼ達成できた。何よりも、重点目標に掲げていた英語版能楽全書の編集を 2 月初めに完了させることができた。最終的な契約は査読等が済むまでできないようだが、ブリル社からは出版に向けて全面的な応援を得ている。能楽研究所所蔵資料仮目録は、現状のままアップしてしまい、閲覧者の便宜をはかりながら逐次修正・加筆していくという方法もあるが、最低限の確認は済ませてからアップするのが責任と考えて、年度内のアップは見送った。来年度は兼任所員の力も借りて、現物との照合等を終え、早めにアップしたい。</p>			

【2021 年度目標の達成状況に関する大学評価】

<p>研究活動、社会貢献、社会連携、これら全ての点において、能楽研究所の 2021 年度の活動は優れている。</p> <p>重点目標を含む 2021 年度目標達成状況については、そのプロセス、達成度の両面において、十分満足できる成果を出している。とりわけ、『英語版能楽全書』の編集完了は、長年にわたる研究成果の集大成として特筆に値する。</p>
--

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた。B: 改善することができなかった。」を意味する。

IV 2022 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
	年度目標	貴重資料及び能楽雑誌のデジタル化と公開を進めるとともに、共同研究の成果である各種データベースをウェブ上で公開する。 オランダ Brill 社より A Companion to Nō and Kyōgen を刊行する。
	達成指標	大正期の雑誌約 140 点、貴重資料約 300 点のデジタル公開。 A Companion to Nō and Kyōgen の刊行。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。
	年度目標	社会の変革期や危機の時代の能楽をテーマに、法政ミュージアムでの特別展示と関連シンポジウム、矢来能楽堂とも協力してのワークショップ等を行い、能楽の普及・発展に役立てる。 市民大学・国立能楽堂・各流能会等での講座・解説を行う。
	達成指標	展示・シンポジウム関連の入場者のべ 500 名以上。 各種講座・解説等への出講 3 回以上。
<p>【重点目標】 特別展示および関連事業は能楽研究所 70 周年記念事業でもあるのでこれを重点目標とする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 研究所と同じく 70 周年を迎え、従来も協力関係にある矢来能楽堂（観世九阜会）と組み、能楽堂での催しに研究所も参加し、また、研究所のシンポジウムやワークショップに九阜会のリーダーである観世喜正氏を迎える。さらに、九段の靖国神社能舞台や能楽研究所のある法政大学と矢来能楽堂をつなぐ、神楽坂の町おこし関係の人たちとも緩やかに繋がりを進めていく。</p>		

【2022 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

能楽研究所の 2022 年度中期目標・年度目標は、研究活動、社会貢献、重点目標いずれの項目も、現状を踏まえて、適切なものと判断できる。過去の例に漏れず、今年度も優れた結果で、これら項目を達成されることを期待したい。

【大学評価総評】

能楽研究所が果たした学際的研究の遂行と、その成果の公表、数々の社会連携による、文化貢献、社会貢献は、一私立大学の研究所が成し得る、ほぼ最高レベルに達している。中でも、『英語版能楽全書』の編集完了は、同研究所が求められてきた、グローバルな視野に基づいた研究活動の集大成であり、70 年以上に及ぶ研究所の歴史においても記念すべき出来事である。

研究所所蔵資料仮目録の公表や、第三者機関による定期的評価など、残された項目はあるものの、限られた人員と予算内で、これほどの成果を成し得たことは、特筆に値する。

同研究所の優れた活動を支え、さらに発展させるべく、大学理事会をはじめ、社会各層、自治体、国による絶え間ない支援が望まれる。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた。B：改善することができなかった。」を意味する。